長瀞観光と長瀞駅前商店街―聞き取り調査の成果から―

西村敏也

はじめに
一　長瀞観光の歴史
二　長瀞駅前と若松食堂
三　長瀞観光の変容
おわりに

はじめに

筆者は、現在まで秩父地方のオイヌサマ信仰に関して研究を進めてきた[1]。オイヌサマ信仰研究に関しては、オイヌサマの護符すなわち御眷属を拝借するための信仰集団である御眷属講の検討という課題がある。寺社主導で結成された講は、御眷属を拝借するために参拝する代参者をくじなどで決定し、寺社へ代参者を送り、寺社ではその代参者という旅人を迎え入れたのである。ただ、代参者という旅人を迎え入れたのは、寺社のみではない。俗人たちが形成する門前、そこに暮らす人々も該当する。本稿では、この俗人たちが形成する門前について検討を進めるものである。

今回取り扱うフィールドは、そうしたオイヌサマ信仰の聖地の一つである宝登山、宝登山神社（写真1）がある長瀞にある門前に関してである。筆者は、宝登山、宝登山神社に関して既に、数本の論考を発表してきたが[2]、今回取り扱うのは秩父鉄道長瀞駅前の商店街という門前である。ただ、長瀞駅前が門前なのかと言われれば、正確には違う。しかし、宝登山神社最寄りの長瀞駅周辺の、旅館、食堂、土産物店を中心に形成された商店街（写真2）は、宝登山神社へ詣でるための信仰集団である宝登山講の講員がナオライや宿泊をする場と

（写真１）宝登山神社拝殿

（写真２）長瀞駅前商店街から宝登山神社一之鳥居を望む

して利用されてきた歴史がある。当の宝登山神社でも、長瀞駅前が門前のような役割を果たしていると認識している。本稿では、この長瀞駅前の商店街を門前とみなし、検討していくものである。

長瀞駅前は宝登山神社の門前としての役割を果たすと同時に、実はもう一つの顔を持っている。実は、長瀞という場所へ訪れる旅人は、宝登山講の参拝者ばかりではない。それ以前にも、もちろんそうした旅人はいたのだが、近代以降顕著となってくる、勝地として、そして地質の重要な場としての長瀞渓谷（写真3）への旅人である。この観光客を受け入れる顔を長瀞駅前の商店街は持っている。長瀞観光においては、先に挙げた宝登山神社という聖地と勝地・貴重な地質の場という長瀞渓谷が、二本の大きな柱となっているのである。

（写真３）長瀞渓谷

さて、本稿では、長瀞駅前の大正時代開業「若松食堂」の大女将である若林不二子氏（以降不二子氏）[3]、その娘若林良美氏（以降良美氏）[4]を始め、栃原嗣雄氏[5]、曽根原正宏氏[6]への聞き取りから長瀞駅前の歴史を構成した。若干文献で補足していくものの[7]、原則的には個人への聞き取りから長瀞駅前の商店街の様子、歴史を描いていく。本稿は、不二子氏の記憶を軸として構成するので、その対象とする時代は、戦後から高度経済成長までの頃が中心となる。また、不二子氏は、長瀞駅前が開発された明治時代後期から大正時代を生きた人々と接していて、その人々から受信した記憶も受け継いでいる。つまり、不二子氏は、開発当時と現在の橋渡し役を演じられる存在であり、そうした人の記憶で商店街の歴史を再現するのである。

本稿を執筆するに至った動機は、宝登山神社の調査の過程で、長瀞という、様々な観光客を向かい入れる地元はどのような場であるのか、それを知りたいと考えたことにある。実は、長瀞町観光協会刊行の『長瀞観光のあゆみ―大正から昭和―』[8]という書籍があるが、良書であり、長瀞観光や長瀞駅前の様子も充分紹介されている。ただ地域の生々しさを伝えるものとは言えず、そこに実際に生活してきた人の目から見ると、観光、駅前の様子、歴史はどのように映っているものなのか、筆者は、そこに関心を持ったのである。そして、その迎え入れる現場は、書き留めておかないと忘れ去られていく運命にあると考え、幸いにも、長く駅前の食堂で、その第一線で働いてきた、不二子氏の存在を知り、その記録を是非とも記しておきたいと考えたのである。

本稿の構成は、まず、第一章で、長瀞、長瀞の近現代、長瀞観光のあらましを、文献を利用して紹介、その後、第二章、第三章で、聞き取り調査で得られた内容を、テーマに沿って整理して紹介する。ちなみに、紙面の関係で、今回は聞き取りで得られた内容のうち、不二子氏のライフヒストリー、若松食堂から見た長瀞観光、などのエピソードを中心に記すことに留める。別稿で、宝登山講の受け入れの実際などを紹介する予定である。また、本稿は、研究の導入にあたる性格のものであること

も付記しておきたい。

一　長瀞観光の歴史

(1) 長瀞について

最初に、長瀞について説明しておきたい。長瀞町は、埼玉県の秩父山地の北東部に位置している。南北に荒川が流れ、荒川に沿って国道一四〇号、秩父鉄道が通る。主要産業は、農林業・畜産・観光などである。観光は、先ほど記したように宝登山と宝登山神社、長瀞渓谷が中心であり、近年では観光農園も人気がある。現町域は、近世初期九村（井戸・岩田・風布・金尾・藤谷淵・本野上・中野上・野上下郷・矢那瀬）が存在した。明治二二年（一八八九）町村制施行の合併により、野上村・樋口村・白鳥村が成立。昭和一五年（一九四〇）野上村は町制を布いた。昭和一八年（一九四三）町村合併促進法により野上町が樋口村と白鳥村の一部と合併して、ほぼ現在の町域が確定した。昭和四七年（一九七三）には町名を長瀞町に改称し、現在に至っている。(9)

次に、長瀞という地名に関してである。長瀞とは、主に荒川中流域の約四キロメートルの渓谷のことを指す。左岸には平坦な結晶方岩が露出した岩畳があり、対岸の岩壁は秩父赤壁と呼ばれる地質である。近世の地誌類には、その様子が記されている。(10) ちなみに、いつから長瀞と呼ばれるようになったかは定かでない。一説には、地元の農家八木重右衛門が命名したと言われる。重右衛門は、天保一二年（一八四一）三月生まれ、梅誠の号を持つ歌人・俳人であり、書にも優れていたという。重右衛門は、藤谷淵は、水が大変美しく、それに静かであるので、水に静をつけて瀞とし、一キロメートルもの間、長く瀞が続くので長瀞と命名したと言われている。(11)

長瀞の名は、当初は通称であったというが、大正一三（一九二四）年、長瀞渓谷が天然記念物指定されたことから、著名となり一般化する。先に述べたように昭和一五年、旧村の合併で野上町が成立した際には、旧藤谷淵村の大字が藤谷淵から長瀞に改称され、昭和四七年（一九七二）に至っては、野上町の名称が長瀞町に改称されるまでに著名となったのである。

(2) 明治時代から昭和時代にかけての長瀞観光

長瀞は、古くから、対外的には宝登山の聖地として知られた場所であった。近世以降、オイヌサマ信仰が盛んになり、宝登山の御眷属拝借のため宝登山講が結成され、その代参者を受け入れることになる。(12) 長瀞を訪れる旅人は、とにもかくにも宝登山という聖地へ向かったのである。近世にも長瀞、特に長瀞渓谷が勝地として評価されていたようであるが、あくまで、宝登山への参拝者や秩父観音霊場巡礼者が、ついでに寄るような場所の位置づけであった。勝地としての長瀞が注目されてくるのは、近代以降のことであった。

最初の転機は、明治一一年（一八七八）、ドイツ人地質学者、ハインリッヒ・エドムント・ナウマン博士が、長瀞を訪れたことによる。当時東京帝国大学地質学教室の初代教授であったナウマンは、学生を引率して長瀞に来た。そして、ヨーロッパで見ることのない、変成岩である結晶方岩を長瀞渓谷の岩畳で見つけることになる。岩畳は三波川変成帯の一部であるが、変成帯は、関東地方から九州まで続く日本最大の断層である中央構造線に、南側に沿って延びているものである。長瀞は、その変成岩が、地表に露出しているのである。ナウマンはこれを知ったこと

をきっかけに、政府に働きかけ地質学研究所を立ち上げ、日本各地の変成帯の調査を始める。現在、埼玉県立自然の博物館前に「日本地質学発祥の地」の石碑が建っているが、このような経緯によるものである。[13] ナウマンの驚きは、世間一般にも知られることになり、その後、東京近隣という地理的条件も相まって、多くの地質学研究者・学生が訪れる場所になった。

さて、明治三一年（一八九八）には、宝登山神社が村社から県社昇格を遂げる。それに先行する明治二〇年（一八三七）代頃から県社昇格運動が盛んとなり、その一環として県社にふさわしい境内整備が明治二八年（一八九五）から始まった。鳥居、春日灯籠、玉垣、敷石、石段などの大規模な整備がおこなわれ、宝登山講参拝者にとっても、訪れたくなるような聖地に生まれ変わった。明治三〇年（一八九五）には「県社加列願」を県へ提出して、翌年の昇格に至る。[14]

ところで、秩父は、古くより秩父絹の産地として有名で、江戸などから買い出しに来た織物商人たちも行き交ったが、山地という性格上、峠道を行かざるを得なかった。それは困難を極める旅路であった。明治一九年（一八三六）には、秩父大宮郷から本庄へ至る新道も開通したものの、交通の不便さは相変わらずであった。秩父大宮郷の柿原萬蔵を中心とした商人達は、鉄道敷設を目指し交渉を進め、明治三一年、逓信大臣から鉄道の本免許を得て、上武鉄道（大正五年〈一九一六〉秩父鉄道に改称）の会社を興した。明治三二年（一八三八）から鉄道敷設が始まり、その後も延伸が続き、大正一〇年（一九二一）には現在の営業路線が確定した。[15] 鉄道は、観光客の交通便利という恩恵をもたらしたが、同時に、秩父鉄道は、一層の観光客増加のため、積極的に長瀞観光に着手することになる。大正元年（一九一二）、旅館の長生館養浩亭を建築。大正四年（一九一七）、民間で遊船（後の長瀞ライン下り）が開業するが、大正一二年（一九二三）には秩父鉄道直営となった。[16] 大正一一年（一九二二）、鉱物陳列所（後の埼玉県立自然の博物館）開業。大正一二年七月宝登山駅を長瀞駅に改称し、長瀞を前面に打ち出していく。大正一三年（一九二四）、長瀞渓谷が天然記念物に指定されると、秩父鉄道は、長瀞対岸の山林を買収して景勝保存に努めた。

その他、地元でも観光の動きが活発化する。宝登山神社社司塩谷啓山を中心に、長瀞を積極的に保存しつつ観光地として整備していくことを目的に、大正一四年（一九二五）、長瀞保勝会が結成される。大正一五年二月、長瀞保勝会は長瀞の将来のビジョンを検討するため協議を開いた。大正一五年八月には船玉祭開催。[17] 昭和二年（一九二七）、金崎にあった旧秩父駅が廃止されると、線路跡に桜・つつじを植えた。同年五月には、長瀞は日本新八景に落選するも、同年七月、渓谷の部で一位の名誉を得て、日本百景となった。

宝登山神社でも、昭和三年（一九二八）御大典記念事業「宝登山頂奥社及び奥社参道拡張整備」をおこない、それにともない、ヤマトタケルを偲ぶ奥社祭が、昭和六年（一九三一）より始まった。

また、大正三年（一九一四）頃から長瀞への学習院・皇族の遠足も恒常化され、それに影響され周辺の学校の遠足の定番の場にもなっていくことになった。[18]

（3）戦後の長瀞観光

長瀞保勝会は、戦後の昭和二一年（一九四六）七月、定期総会を開き

活動を再開した。ただ、観光の柱の一つである宝登山神社は受難の時代に入っていた。神道指令による国家神道の解体は、全国的に神社にダメージを与え、なおかつ戦災と農地改革で、講の担い手のいる農村は疲弊し、参拝どころではなくなっていたのである。しかし、宝登山神社では、信仰の復活を目指し、宝登山講の活動再開を促し、三峰講に宝登山講を付加させるというかたちでの新規開拓も進めた。その努力が実り、宝登山講は増加し、宝登山神社への参拝者も徐々に増えていき、昭和四〇年（一九六五）代頃から、バスの参拝形態への変化も相まって急増してくる。[19]

また、昭和二四年（一九四九）四月の秩父自然科学博物館竣工、昭和二五年（一九五〇）の秩父多摩国立公園指定、翌昭和二六年（一九五一）の埼玉県立長瀞自然公園の指定は、長瀞の観光地復興の追い風となった。高度経済成長の時期になると、宝登山では、昭和三五年（一九六〇）宝登山山頂に野猿動物園開業、翌昭和三六年（一九六一）には宝登山ロープウエイが敷設されるという動きが起きた。また、昭和四九年（一九七四）、長瀞町全体で観光を支えていく組織として、長瀞町観光協会が発足する。昭和五三年（一九七八）には、秩父鉄道は、長瀞火祭り開催を恒常化させる。昭和六一年（一九八六）、宝登山山頂に梅百花園が開園、昭和六三年（一九八八）、秩父鉄道は蒸気機関車のパレオエクスプレスの土日運行を開始する。近年では、平成二三年（二〇一一）、ジオパーク秩父が認可され、長瀞は重要な場所となった。[20] 平成二六年（二〇一四）には『ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン』で宝登山神社に一つ星が付けられ、[21] 海外でも注目される場所になった。

二　長瀞駅前と若松食堂

（1）長瀞駅前

長瀞で繁華な場所と言えば、近世以来秩父往還にあった野上宿であった。野上宿は、陣屋、旅籠、飲食店が軒を連ね、大変賑やかであったという。しかし、大正二年（一九一三）、大火が発生してダメージを受けた以後は、衰退する。[22] 秩父鉄道の敷設が始まり、明治四四年（一九一一）、長瀞駅（当時は宝登山駅であったが）が開設されると、野上宿と入れ替わるように、繁華な場所は長瀞駅前に移ることになった。実は、現在長瀞観光の拠点となっている長瀞駅前の歴史は意外に新しいのである。

はじめに、で述べたように、長瀞駅前は、宝登山神社と長瀞渓谷の観光客を受け入れるという、二つの観光の拠点となった。線路を挟んで長瀞駅の両側に商店街が形成されるが、宝登山神社側を宝登山地区、長瀞渓谷のある荒川側を長瀞地区という。長瀞駅周辺は、旧藤谷淵村領域で、大字名は藤谷淵から長瀞に変更されたが、駅が出来て商店が軒を連ねるようになる前は、農地であった。[23]

例えば、こんなエピソードもある。長瀞には、かつて造り酒屋の村山酒造があったが、明治時代頃、新潟から移住してきて造り酒屋を興した。酒造業を興すには認可が必要で、周辺の有力者三人が身元保証人になった。銘柄は「宝鯉」（たからこい）であったというが、現在は廃業している。村山酒造では、長瀞駅周辺が将来賑わうことを見越して、土地を取得したようなのである。村山酒造から土地を借りて営業している店も多かったという。[24]

戦後、宝登山、長瀞渓谷への観光客が増加すると、それにともない、

駅周辺の整備が進められた。モータリゼーションの進展から自動車の交通量は増大。長瀞駅前商店街の車道の交通量も増加したため、昭和二九年（一九五四）、国道一四〇号線から長瀞駅までの松並木道を、中央車道七メートルに拡張し、観光客のため南北両側には四・五メートルの歩道も設置された[25]。また、昭和三〇年（一九五五）には、長瀞駅前商店街の両歩道に街路灯十六基が設置された（昭和六一年〈一九八六〉には、現在のガス灯型デザインの街路灯を設置した[26]）。翌昭和三一年（一九五六）には、国道一四〇号の宝登山神社入り口に大鳥居（秩父鉄道社主諸井貫一氏奉納）が建設され、長瀞のシンボル的存在となった[27]。昭和三六年（一九六一）には、同交差点に、秩父郡内で始めての信号が設置された。

（2）若林不二子氏のライフヒストリー

ここから、若林不二子氏（以後不二子氏）からおうかがいしたお話を中心に、長瀞駅前について記述していくが、まず、不二子氏のライフヒストリーを記したい。不二子氏は、昭和五年（一九二七）生まれ、旧姓田村、三歳まで、東京愛宕町（現東京都港区）に住んだ[28]。二歳で父親を亡くしたという[29]。その後、東京小石川（現東京都文京区）へ引っ越した。不二子氏は、幼少期、扁桃腺が弱く身体が丈夫でなかったということで、夏休みの間は、転地療法で長瀞へやってきて、長瀞駅前の旅館である宝登山亭に身を寄せていたという。不二子氏の祖母（六人兄弟の長女であったという）は、宝登山亭の出身で、親戚だったのである。当時、宝登山亭には子供がおらず（跡取りとなる）、自分の娘のようにかわいがられた記憶があるという。戦中は、長瀞に疎開していたともいう。地元の野上尋常小学校、実習女学校（秩父郡皆野町）を卒業するが、女学校時代に長瀞で終戦を迎えた。

ここで宝登山亭についてふれるに、宝登山亭は、現在はなくなっている。先代が亡くなり、後継者は、すぐに店をたたんで、他所へ出て行った。しばらく空き家の状態であったという。今から十年ほど前に更地にしたが、現在は長瀞駅の駐車場になっている。当時の宝登山亭は、不二子氏の記憶によれば、二階に客室が四室。一階にも客室があり、中庭もあった。一階部分の多くはカフェで大正時代のような雰囲気の造りであったという。藤谷淵茶屋と名前を付けて、カフェをしていた。

話を元に戻すに、不二子氏が、終戦を迎えた後のことである。その後嫁ぎ先となる若松食堂の当時の主人は、若林金一郎氏（以後金一郎氏）であった。明治四二年（一九〇九）生れであった。不二子氏は、うちの息子の嫁にと請われた。息子とは、金一郎氏の長男であった若林賢治氏（以後賢治氏）のことである。昭和六年（一九二八）生まれであった。不二子氏は、昭和二七年（一九五二）に賢治氏と結婚した。

賢治氏は、金一郎氏の末っ子で四二歳の時の子であり、姉が三人いたが、末の姉からも八歳離れていた。金一郎氏は、この三人の姉に、跡取りの嫁である不二子氏を大事にするよう常々言っていたという。また、義姉らも良い人たちだったので、関係も良好であったという。一番上の姉は、東京に嫁いていたが、戦争未亡人となり、昭和二三年（一九四八）年、長瀞の実家へ帰ってきて、不二子氏とも暮らした。昭和三九年（一九六四）頃には、若松食堂の裏手に家を建てて、移り住んだという。

賢治氏の一番下の姉は、埼玉師範学校（現埼玉大学）を卒業して教員をしていた。有隣倶楽部近くの地名「のっちやま」（宝登山神社近く）で農家をしていたT家に嫁いだ。T家が、火災に遭ったため、金一郎氏

は、長瀞駅周辺に下りてくるよう進言して、駅近くに居を構えたという。農家で、葉タバコ[30]を栽培する他、牛・豚などの畜産もしていた。その後、タバコ屋を始め、後に土産物も扱うようになった。屋号は長瀞屋を名乗った（現在でも、長瀞屋のことを「のっち」と呼んでいるという）。長瀞屋は、現在、家屋の一階部分をライン下りの事務所に貸し出している。義姉の夫には、妹がいたが、病気がちで家にいたので、家事をしてくれて、義姉は教員を続けられたという。

金一郎氏であるが、戦中、近衛兵として出征したという。長身（一七〇センチメートル以上の身長があった。当時の男性としては長身である）で、器用に何でもこなすような人であったという。地元では、若松の金さんなどと呼んで親しまれていた。ちなみに、金一郎氏は、不二子氏を信頼しており、死に水をとってもらいたいなどと言っていたという。

また、不二子氏は、赤十字奉仕会員であるという。かつては、皇居に清掃活動のため出かけたりしたという。平成五年（一九九三）、今上天皇・皇后が長瀞に行幸啓しているが、表に出て歓迎したという。天皇皇后は、自動車で訪問し、長生館に宿泊後[31]、お召し列車で帰路についた。また、不二子氏は、観光協会女性部にも入っている。

不二子氏は、十五年ほど前から、宝登山神社の七日会の活動にも参加している。宝登山神社では、毎月七日、主神の御眷属であるオイヌサマに扶持を供える儀礼を挙行しているが、七日会という崇敬者団体もこの儀礼に参列している[32]。不二子氏は、七日会の会計職のO氏に誘われ、また、長瀞屋にいる義姉にも勧められ、加入したという。毎月七日、早朝宝登山神社へ出向くが、O氏の車で、現在は近年より参加しだした良美氏とその運転の車で出かけるという。早朝の午前五時半に家を出て参列し、帰宅は午前八時頃になるという。

（3）若松食堂

若松食堂は、大正元年（一九一二）の創業である。当初は、叺（かます）、わら草履など、農具を販売していた。店裏には畑があり、麦を作っていたといい、不二子氏は、昔、麦踏みをした記憶があるという。「若松」の屋号は、成田山門前の若松（旅館若松本店）[33]に因んだものである。成田山の若松は、創業二四〇年を超えるという成田講の宿泊や中食を受け入れる老舗旅館である。若松食堂では、成田講で成田山新勝寺へ参詣していたが、その繁盛ぶりにあやかったのだという。また、現在の若松食堂の建物は、昭和三二年（一九五七）に建て替えたものである。

さて、長瀞駅前の商店街の一年は、以下のように流れていく。一月の宝登山神社の初詣、二月は一息つくが、三月になると（十一月まで）長瀞ライン下りが始まり、観光客で賑わう。特に五月はゴールデンウイークを中心に忙しさのピークを迎えるが、五月は宝登山講の代参も多い。八月は夏休みで、秋は紅葉で忙しい。十二月二・三日の秩父夜祭りが終わると新年を迎える準備である。このように、一年を通じて、長瀞駅前は忙しい。ゴールデンウイークなど、特に忙しい時は、不二子氏や娘の良美氏の子供のPTA仲間の奥さんたちに、店を手伝ってもらうこともあったという。現在、アルバイトをしたいと応募してくる若者がいるが、雇ってみるものの、三日ぐらいでやめてしまい定着しないという。仕事の内容の厳しさや、忙しい時に荒っぽく指示したりするのに若者はついていけないのかも知れないと感じているという。それほどの忙しさなのである。忙しい時は、一俵炊いたご飯も午後三時頃にはなくなって

しまう。場合によっては、メニューの種類を調整して対応する。かつては（昭和四〇～五〇年代頃のこと）、良美氏の友人も手伝いに来たという。当時、周辺では白米をあまり食べなかったといい、賄い料理に白米のご飯を常時出したので、驚かれた。カツ丼なども賄い料理に出したが、当時は野菜などを中心とした食事だったので、大変珍しがられた。ちなみに、若松食堂では、ちり紙も白いものを利用していたので、こちらも珍しがられたという。

若松食堂では、十年ほど前まで、タバコの小売販売しており、自動販売機も設置していた。現在はやめて、権利は長瀞屋へ売った。長瀞駅周辺でタバコの小売販売をしていたのは、若松食堂を含め、やなぎや（民宿やなぎや）、秩父館（旅館）の三軒であった。タバコは販売実績で卸され、タバコが売り切れてしまい仕入れが追いつかなくなると、タバコ小売販売店同士で補い合って助け合ったという。日本専売公社の支所は秩父市内にあり、仕入れに行ったという。現在、日本専売公社の後身のJT（日本たばこ産業）の支店は熊谷にあり、タバコ小売販売店は、そこから仕入れている。かつて、タバコの小売は大変儲かったという。タバコの単価は低いものの、それを数が補ったという。外国タバコなどで新作が出ると、試供品も多くもらえたという。現在、小売販売に関しては規制が緩く、自動販売機、コンビニエンスストアーでの販売も増え、平成一四年（二〇〇二）制定の健康増進法から禁煙の流れも強くなり、タバコはあまり儲からなくなった。ちなみに、タバコ小売販売をしていた当時は、タバコの需要があるので、午前八時から午後九時まで、長時間にわたって店を開いていた。夜になると、周辺の旅館に宿泊している客が、夜、ぷらぷらと散歩がてらやってきてタバコを買ったり、ラーメンを食べていったという。

実は夫の賢治氏は、ラーメンも店に出し始めていたのである。かん水も利用して、機械で製麺からおこなうという本格的なものであった。また、賢治氏は、うどんも打っており、周辺の店へも卸していた。賢治氏は、長瀞グリーンホテル（平成二八年〈二〇一六〉廃業）の主人から、スープを含め、ラーメンの作り方の一切合切を習った。ちなみに、若松食堂では現在もラーメンをメニューとして提供している。また、賢治氏の一番上の姉は、先ほども述べた通り戦争未亡人となり、実家の若松食堂へ帰ってきていた。義姉は、鴻巣（埼玉県鴻巣市）で寿司を習ったということで、若松食堂でも寿司をメニューとして出した。「宝寿司」と称し、寿司桶やその他道具類にも名前を付けたという。一日三百人分が対応できるなど、本格的におこなっていた。不二子氏も寿司を作るのを、積極的に手伝ったという。また、その縁で鴻巣にも宝登山講が結成されたという。

若松食堂では、かき氷も一年を通じてメニューとして出している。かき氷は、かつてはカンナで、その後は手動のかき氷機で、現在は電動のかき氷機でかいている。かき氷を手動でかくのは、かなり大変であっただけに、電動のかき氷機が出て、大変楽になったという。氷は、明治二三年（一八九〇）創業の長瀞にある氷店阿左美冷蔵[34]から購入している。冷蔵庫が普及する前は、毎日早朝、阿左美冷蔵が氷を届けたものであった。ちなみに、阿左美冷蔵は、現在は若者を中心に、かき氷が大人気で、夏休み中などは、行列ができる程の賑わいを見せ、長瀞観光の目玉の一つとなっている。さて、かき氷の暖簾、旗は毎年、阿左美冷蔵が持ってくるというが、現在、暖簾、旗の布は、若松食堂をナオライの場

として利用している東京本田講の講元である瀧澤氏経営の東京和晒のものである。[35] また、氷は、かき氷の他、焼酎割などにも利用するため、一回、十貫目（約三十七・五キログラム）を購入する。氷は、天然氷を利用して作っている、阿左美冷蔵所有のプールのところで切り売りしてくれるという。

若松食堂では、菓子販売もする。不二子氏が嫁ぐ前には、「はるもち」という菓子も作っていたといい、旅館にも卸していたという。現在は、熊谷の銘菓である「五家宝」[36]を熊谷から取り寄せて販売している。また、現在、若松の人気商品は、まんじゅうである。白、黒糖の二種類があり、若松の手作りである。

また、かつて、金一郎氏は、長瀞名物の蝋石を石屋から仕入れ、写真立てなどを作り、商品として販売していたという。

（4）若松食堂と宝登山神社

宝登山講では参拝後ナオライをおこなうが、会場は、宝登山神社の他、長瀞駅前の食堂である。例えば、若松食堂は、最大の宝登山講である先ほど記した東京本田講のナオライの場となっている。東京本田講では、かつて宝登山神社だけでナオライをしていたが、高度経済成長の頃、組織が大きくなりすぎて宝登山神社だけでは対応できなくなってきた。そのため、若松食堂で受け入れるようになったのである。組織がより大きくなると、周りの店にもお願いして対応した。村山食堂、臨江亭本店、長瀞屋である。若松食堂では、東京本田講以外の宝登山講のナオライも受けているが、長瀞駅周辺で、若松食堂同様に、様々な宝登山講の対応をしているのは、前記の店の他、宝登山亭、見晴亭、秩父館である。

長瀞駅前の商店と宝登山神社の関係は、古くから密接である。先代宮司の横田茂氏は、宝登山神社繁栄のため、宝登山講拡張に熱心に取り組んだ。そして、宝登山神社崇敬者を受け入れる商店とも親しく関係を取り結んだ。若松食堂でも、横田宮司と親しくしたという。横田宮司は、若松食堂へも宝登山講を紹介してくれたといい、若林家の表札も横田宮司に書いてもらったものである。

宝登山神社のナオライには、以前は若松食堂でも、土産物を売りに行っていた。不二子氏は、宝登山講のナオライに合わせて、土産を売りに行ったのである。ナオライの席で、神主が挨拶した後、不二子氏が得意としていた秩父音頭・長瀞小唄を踊り、参加者にお酌もしたという。ナオライは、ただ食事をするだけのものであり、こうした余興は大変な人気であったという。また、若松食堂での、宝登山講のナオライの席でも、踊りを披露して好評であった。若松食堂の二階は宴会場であり、ここでナオライはおこなわれた。

ちなみに、現在は長瀞の商店は、土産を売りに行かなくなった。現在ナオライの席に、販売に来ているのは、長瀞近隣の肉店であり、味噌漬けの豚肉を売りに来る。それは「せかい」（秩父市本町）などの肉店である。味噌漬けの豚肉は、秩父地方の猟師が、冷蔵庫がない時代、猪を捕った後に味噌で保存した方法を、豚肉に応用したものである。味噌は塩分を含み、発酵食品なので保存に適している。[37] 秩父では味噌も特産品であるが、味噌漬けは伝統食でもある。肉店では、秩父で販売できるイベントは限られるので、多くの宝登山講が参拝するナオライの場は絶好の営業機会である。毎年三月頃、肉店では挨拶にきては、講の参拝の予

定日を確認する。講の参拝日には、二人の営業職が味噌漬けの肉を持参する。ナオライの席で、まず神職が挨拶を済ますと、続いて営業の人が挨拶する。ナオライの場では、試食品も提供する。そして、ナオライ会場の大広間の端に、出店を出店して販売するのである。肉は真空パックに入っており、肉店では講員のおおよその数を事前に把握して、それに対応するよう仕入れ、加工してくる。講員は、自宅用の他、近所へ配る分も購入しているようで人気である。[38]

三　長瀞観光の変容

（1）芸者

昔は、長瀞駅に、旅館の番頭が観光客を迎えに来る光景が見られたという。駅前には、映画館・芝居小屋もあったという。いかに観光客が多かったかを示すエピソードである。そして、日本各地の町で、かつてそうであったように、観光客をもてなす芸者とそれを維持する芸妓組合が、長瀞にも存在したのである。以下、不二子氏の記憶を軸に芸者のことを記したい。

芸者は置屋に所属していた。見番が受け付けて、芸者は派遣されて座敷に出ていた。その他旅館では内芸者を抱えていて、抱える旅館の座敷に上がった。ただ、その管理は置屋がおこない、経済的負担を旅館が担っていたという。また、内芸者も時には別の旅館の座敷にも上がったという。不二子氏の記憶によれば、昔は、置屋が最大五軒ほどあったという。芸者も最盛期は二〇人ほどいたと記憶しているという。

若松食堂の裏手には、芸者が三人ほど住んでいたことがあるという。昼は三味線の稽古をして準備をして、夜は座敷に上がったのである。ただ、若松食堂が忙しい時は、昼間の間、手伝ってくれたという。[39]

参拝するのにバスが登場する以前の電車で参拝していた時代、宝登山講の参拝客で、長瀞に宿泊する人も多くいたという。ということで、各旅館では講を受け入れていたのである。そして、講によっては、予約をして、芸者を呼んでいたという。例えば、旅館の見晴亭では三人の内芸者を抱えていたという。見晴亭では、宝登山講も多く受け入れていたので、芸者は講の宴席の座敷にも出ていたと考えられる。

秩父鉄道の線路際、桜の季節になると、舞台が設置され催しがおこなわれたが、芸者の踊りも披露された。また、昭和五年（一九三〇）、岩畳で催しがあったが、秩父からも芸者が来て、不二子氏は賑やかだったと聞いたことがあるという。はっきりしないが、その後、芸者はいなくなった。晩年は、芸者のなり手がいないのか、年寄りの芸者たちが残っていたという。

（2）長瀞ライン下り

長瀞ライン下りは、民間で始まったものだがその後秩父鉄道一社体制となり、現在は秩父鉄道の他民間二社も参入している、長瀞ライン下りは、長瀞観光の名物の一つであるが、数社に増えて、競合関係が出てきて活気が出てきたイメージであるという。ゴールデンウイーク、他に迂回路がないため、国道一四〇号は渋滞するが、ライン下りの船は、下流へ着くと、車に乗せて上流に戻さなければならないが、それが困難になる。現在も対応がとれていない。駐車場が少ないのも一因である。

さて、昔は、長瀞駅前の店ではお客に対しライン下りを紹介し、客が乗船となると、一割ほどの紹介手数料があったという。食事をしている

客に勧めて、券売り場へ案内していた。皆、店に割引券も置いていたものだという。現在、券売り場は岩畳のところにあるものの、長瀞屋が一階部分をライン下りの会社に貸し出し、案内所が出来たので、紹介のシステムは無くなったという。

（3）交通の変化と参拝客

宝登山講を兼ねている講が多い三峰講であるが、電車からバス、マイカーに交通手段がとって変わり、参拝は日帰りになり、三峰山の宿坊である興雲閣に宿泊する人も減少するようになった。平成一〇年（一九九八）には、国道一四〇号に雁坂トンネル（雁坂トンネル有料道路）[40]が出来た。山梨県側へ抜けることができるようになったため、興雲閣へ宿泊していた参拝者が、三峰山参拝後興雲閣に泊まらず、山梨県最大の温泉地である石和まで出て宿泊してしまうというケースも出てきた。

平成一九年（二〇〇七）、圏央道[41]（首都圏中央連絡自動車道）が中央高速道とつながったことにより、長瀞の人は、山梨県へ行く場合、雁坂トンネルを利用しないで、花園インターチェンジから関越道、圏央道、中央道を経由して出かけるようになった。周辺の市町村でもその動きが強まってきて、雁坂トンネル利用者が減ってきた。雁坂トンネルでは、平成二七年（二〇一五）七月～一一月の間、無料の措置をとるなどして対応している。三峰講、宝登山講の動きにも変化が生じてきているのである。[42]

おわりに

第一章では、文献によって長瀞という場と長瀞観光のあらましを紹介し、第二章では若林不二子氏の聞き取りを中心に、長瀞駅前と若松食堂について、第三章では、長瀞と長瀞駅前の変容を芸者、長瀞ライン下り、交通のトピックスから紹介した。

長瀞駅前は、近代の鉄道時代が作り上げた新たな観光拠点である。前近代以来の宝登山神社への信仰という観光資源と、長瀞渓谷という、ほぼ近代以後立ち上がってくる地質・景観という自然の観光資源を求めて訪れる旅人の立ち寄る場になった。

確かに、行政などによる戦略的な部分が観光地の発展には重要であることは分かる。しかし、同時に、商店一軒一軒の地道な変わらぬ毎日の積み重ねと一方で創意工夫するチャレンジ精神が、観光地に生気や躍動感をもたらしていることを忘れてはならない。ところが、こうしたことに限って、記録されることが少ないのが現状である。消え去って行く運命の歴史とも言えようか。今回、このようなかたちではあるものの、紹介できたことの意義は、大きかったと信じたい。

さて、今後の課題である。調査は端緒に就いたばかりで、本稿は導入部分に過ぎない。聞き取り調査を継続し、本稿で紹介できなかった長瀞駅前の宝登山講受け入れの具体的な様子や、調査先を拡大することにより、長瀞駅前全体の様子も追跡したいと考えている。一方、過去のことに興味があると同時に、未来にも興味を持っている自分がある。長瀞では、現在、宝登山神社と長瀞渓谷という二つの観光地の古さを大切にしつつ、それでいて新しい観光地づくりへの取り組みもおこなわれている。長瀞観光と長瀞駅前が、今後、どのように展開していくのか、追求していきたいとも考えている。

［付記］

本稿作成にあたっては、若林不二子氏、若林良美氏、そして、お話しを聞かせていただくのと同時に、いろいろアドバイスをいただいた曽根原正宏氏（宝登山神社祢宜）、栃原嗣雄先生に改めてお礼申し上げたい。

註

（1）拙著『武州三峰山の歴史民俗学的研究』岩田書院、二〇〇九年、拙稿「狼信仰に関する一試論―狼信仰寺社とその由緒―」（『武蔵大学人文学会雑誌』一六一）、拙稿「秩父地方に展開する狼信仰寺社とその由緒」（『動物観研究』14、二〇一〇年）、拙稿「秩父市荒川贄川猪狩神社の狼信仰の展開」（『東京成徳大学人文学部・応用心理学部研究紀要』18、二〇一一年）、拙稿「秩父若御子神社の狼信仰に関する一考察」（『武蔵大学総合研究所紀要』20、二〇一一年）、拙稿「釜山神社の狼信仰―オタキアゲの考察を中心に―」（西海賢二編『山岳信仰と村落社会』岩田書院、二〇一二年）、拙稿「釜伏講に関する一考察」（長谷部八朗編『「講」研究の可能性』慶友社、二〇一三年）、拙稿「秩父蓑山神社の狼信仰」（『山岳修験』53、二〇一四年）、拙稿「秩父市吉田石間の城峰神社の歴史と信仰」（『武蔵大学総合研究所紀要』25、二〇一六年）、拙稿「城峰神社（矢納）のオイヌサマ信仰と城峰講」（長谷部八朗編『「講」研究の可能性3』慶友社、二〇一六年）など

（2）拙稿「秩父宝登山の狼信仰―オタキアゲと七日会の考察を通して―」（『日本山岳文化論集』9、二〇一一年）、拙稿「東京尚運講に関する一考察」（『埼玉民俗』34、二〇一五年）、拙稿「東京本田講に関する一考察」（『武蔵大学総合研究所紀要』24、二〇一五年）、拙稿「宝登山のオイヌサマ信仰と宝登山講」（『山岳修験』57、二〇一六年）、拙稿「宝登山（埼玉県秩父郡長瀞町）の宝玉稲荷社について」（『朱』60、二〇一七年）

（3）二〇一四～五年、筆者による若林不二子氏への聞き取り調査

（4）二〇一四～五年、筆者による若林良美氏への聞き取り調査

（5）二〇一四年、筆者による栃原嗣雄氏への聞き取り調査

（6）二〇一五年、筆者による曽根原正宏氏への聞き取り調査

（7）参考文献は次のものを利用した。「宝登山神社」（埼玉県神社庁秩父郡市支部『秩父郡市神社誌』一九七四年、『ながとろ風土記』埼玉県秩父郡長瀞町・長瀞町教育委員会、一九七四年、埼玉県秩父郡長瀞町宝登山神社々務所『宝登山―宝登山神社誌稿―』一九七九年、『角川日本地名大辞典11埼玉県』角川書店、一九八〇年、埼玉県神社庁神社調査団編『埼玉県の神社 入間・北埼玉・秩父』埼玉県神社庁、一九八六年、長瀞駅前商工会・山中宗千編『ふれあい通り』長瀞駅前商店会、一九八八年、栃原嗣雄『宝登山神社』（さきたま文庫4）、さきたま出版会、一九八九年、『長瀞観光のあゆみ―大正から昭和―』長瀞町観光協会、一九九〇年、『日本歴史地名大系第11巻 埼玉県の地名』平凡社、一九九三年、長瀞町教育委員会編『長瀞町史 近代・現代資料編』長瀞町、一九九五年、長瀞町教育委員会編『長瀞町史 民俗編Ⅰ』長瀞町、一九九九年、『週刊 神社紀行 46秩父三社』学習研究社、二〇〇三年

（8）前掲『長瀞観光のあゆみ―大正から昭和―』

（9）前掲『角川日本地名大辞典11埼玉県』、前掲『日本歴史地名大系第11巻 埼玉県の地名』

「長瀞町」HP http://www.town.nagatoro.saitama.jp/（2017/03/01）参照

（10）「天保巡検日記」「秩父日記」『宝登山図絵』などの文献にも記載されている（前掲『角川日本地名大辞典11埼玉県』、前掲『日本歴史地名大系第11巻 埼玉県の地名』、前掲『宝登山―宝登山神社誌稿―』参照）

（11）前掲『長瀞風土記』二〇九頁

（12）前掲「宝登山のオイヌサマ信仰と宝登山講」参照

（13）長瀞町教育委員会編『長瀞町史 長瀞の自然』長瀞町参照

（14）前掲「宝登山（埼玉県秩父郡長瀞町）の宝玉稲荷社について」

（15）新井壽郎監修『保存版 秩父鉄道の100年―鉄道とともに歩む人びとの1世紀のドラマ―』郷土出版社、一九九九年参照

（16）戦後に大人気となった。現在はラフティング、カヌーも若者を中心に大変人気がある「mont・bell」HP https://event.montbell.jp/plan/?cid=7（2017/03/01）参照

（17）昭和二年（一九二七）八月から、三日間開催という現在の形態へ

(18) 前掲『宝登山―宝登山神社誌稿―』参照
(19) 前掲「宝登山のオイヌサマ信仰と宝登山講」参照
(20) 前掲『長瀞観光のあゆみ―大正から昭和―』参照
(21) 「長瀞町商工会」HP https://www.nagatoro.gr.jp/（2017/03/01）参照
(22) 前掲『長瀞町史 民俗編Ⅰ』一六二頁、一七九頁
(23) 二〇一四年、筆者による栃原嗣雄氏への聞き取り調査
(24) 二〇一四年、筆者による栃原嗣雄氏への聞き取り調査
(25) 前掲『ふれあい通り』六頁
(26) ちなみに銀座通り（岩畳通り）は拡張ができず、そのため、代わりに長生館までの通りが拡張されたという（二〇一四年、筆者による栃原嗣雄氏への聞き取り調査）
(27) 国道一四〇号から宝登山への参道について。もとは杉並木であったがそれが刈られた（二〇一四年、筆者による栃原嗣雄氏への聞き取り調査）
(28) 資産家で、三階建ての洋館の自宅で、お手伝いさんも多くいたという
(29) 不二子氏の母親はその後、都バス運転手の男性と再婚した。不二子氏にとって父親違いの兄弟三人ができた。不二子氏と両親が一緒の兄弟はいない
(30) 江戸時代には、秩父往還の宿場町の野上宿では、二と七の日にタバコの取り引きのため、市がたったという（前掲『角川日本地名大辞典11 埼玉県』一三一七頁、前掲『長瀞町史 民俗編Ⅰ』一七九頁、二七二頁参照）
(31) 大正四年（一九一五）開業。昭和四一年（一九六六）の、昭和天皇・皇后の行幸啓でも宿泊している。現在、玄関先には美智子皇后が座った「幸せの椅子」が展示されている。その他の皇族も宿泊しており、地元では皇室御用達の宿と言われている
「長生館」HP http://choseikan.com/（2017/03/01）参照
(32) 前掲「秩父宝登山の狼信仰―オタキアゲと七日会の考察を通して―」参照
(33) 「旅館 若松本店」HP http://www.wakamatsuhonten.jp/（2017/03/01）参照
(34) 「阿左美冷蔵」公式ブログ http://asamireizou.blog.jp/（2017/03/01）参照
(35) 東京本田講については、前掲拙稿「東京本田講に関する一考察」参照
(36) 江戸時代から熊谷で親しまれている、餅米、きなこに糖密を絡めて作った和菓子である。由来は諸説あり、現在のかたちの菓子になったのは明治以後だという。熊谷には、現在、製造する店が数多くある
「五家宝本舗 紅葉屋」HP http://momijiyahonten.com/（2017/03/01）参照
(37) 「秩父豚肉味噌漬本舗 せかい」HP http://www.sekaishoji.com/（2017/03/01）
「肉の安田屋」HP http://yasudaya-shop.com/（2017/03/01）参照
(38) 二〇一五年、筆者による曽根原正宏氏への聞き取り調査
(39) 良美氏も子供の時、遊んでもらったりしたという。その芸者は、横瀬町の男性の妾で、その土地は近隣の人のものであったが、その男性が買い上げ、芸者に家を用意したという。その芸者は、後に置屋を経営した。その男性の死後、その息子がその事実を知って、衝撃を受けたという。その土地は、芸者が土地を離れる時、知っている人に買ってもらいたいということで、若松食堂で買い上げた
(40) 「雁坂トンネル公式サイト」HP http://www.fruits.ne.jp/~karisaka/（2017/03/01）参照
(41) 「国土交通省関東地方整備局」HP http://www.ktr.mlit.go.jp/（2017/03/01）参照
(42) 秩父では、交通が便利になり、逆に過疎化も進むケースも出てきた。秩父から通うのではなく、思い切って他所へ転出しても、交通が便利になって帰省がしやすくなったためだという（二〇一五年、筆者による曽根原正宏氏への聞き取り調査）